

79 The Systematic Classic of Acupuncture/Moxibustion (英訳『鍼灸甲乙経』) について

誌上発表

宮川 隆弘

日本鍼灸研究会

本書は、晋の皇甫謐が著わしたとされる『鍼灸甲乙経』十二卷（以下『甲乙経』と略す）の英語による完訳書で、1994年、アメリカのBlue Poppy Pressより刊行された。

中心的な訳者であるYang Shou-zhongは河北省唐山の儒者の家に生まれ、1950年から10年間、叔父から医経を含む経文を学んだ。1960年から64年に唐山大学で英語を学び、文学士の学位を得て、1966年から68年には著名な医家について中国医学と鍼灸を学んだ。文化大革命の際、多くの人々と同様に農村に下放されたが、引き続き中国医学の研鑽を積み治療家として高い評価を受けた。1972年から79年には中学校の校長をつとめるとともに、はだしの医者の特設養成課程の講師でもあった。文革後、1985年には北京語言学院の英語の大学院を卒業、英語の講師として華北煤炭医学院に赴任した。これによって、1985年から86年には当大学のリハビリテーション研究センターで個人的に医学研究を行うことが可能となり、その後は今日まで英語を教授する傍ら、華北煤炭医学院雑誌の編集者、気功リサーチセンターの指導者、外国人留学生に対する中国医学と鍼灸の講師として活躍している。著書は、詩集、文芸評論などのほか、英文法についても2冊の著作がある。またYangは、上級の英訳者として、Blue Poppy Pressのマスターシリーズの取りまとめ役でもある。このシリーズは、近世までに著された中国医書の英訳叢書で、本書のほかに、『傳青主女科』、『脾胃論』、『中蔵経』、『各致余論』、『丹溪治法心要』、『神応経』、『神農本草経』、『医学伝心録』、『脈経』、『難経』などが刊行されている。

本書の訳者序文では、まず『甲乙経』の書名の由来、明代までの鍼灸の略史、『甲乙経』の意義などを説明し、次に皇甫謐の伝記、版本及び既出の注解書について説明した後、翻訳に際しての留意点などが述べられている。

冒頭の林億序は除かれているものの、皇甫謐の序文と本文は全訳されている。専門用語については、斜体の拼音で記され、随時脚注を附して説明されている。各篇の冒頭には、その欄外に『素問』、『靈枢』、『明堂孔穴鍼灸治要』の所出個所が明記されている。また、Nigel Wisemanが1991年に刊行したGlossary of Chinese Medical Terms and Acupuncture Pointsと比較して語彙が異なる場合や、人物名、書籍名などは、英語圏の読者に配慮して、文中あるいは欄外に漢語の英訳と拼音による表記と説明が加えられている。例えば、卷三所載の公孫穴は、Offspring of Duke (Gong Sun GB4)と表記されている。また、孔穴によっては、[]を入れて宋以前の鍼灸書との対照比較を行っている。なかでも『素問』気穴論、気府論、骨空論、水熱穴論の王冰注に引かれている『中誥』の援用は、この『中誥』を古い『明堂』関係の一資料と認識したものであると考えられる。

経文への注解においても、王冰、楊上善、馬玄台、張介賓、李中梓、張志聡などの主要な医家の注釈が援用されている。古代の病名は、巢元方の『諸病源候論』など、鍼灸の関連事項は、『銅人腧穴鍼灸図経』、『聖濟総録』、『医学綱目』、『鍼灸聚英』、『類経図翼』などの鍼灸書を引用して解説している。また、注意または参照すべき事項についても、『千金要方』、『景岳全書』、『素問識』などを引いて分かりやすく説明している。本書に先行する山東中医学院編『鍼灸甲乙経校訳』（1979年刊）や関連書籍を参考に行っていることはいうまでもない。

英語圏において、こうした重要な古医書が英語で刊行されたことは、Yangらの功績であり、中国医学及び鍼灸を考究する上で貴重な成果であると考えられる。